

“年のはじめ”に

H25年1月 理事長 片山喜章

園生活において、新年を迎えることは、一年のまとめの時期が始まると同時に、今年度の保育を総括しながら、次年度の保育を考え始めるときです。最近の子どもたちの様子を見てみると、超スゴイ時代の影響を強く受けているように感じます。人は心も体もひとりひとり異なりますが、保育や教育においては、学年、あるいはクラス単位の計画があり、目標やねらいがクラス児童全員に「達成のための目標」として課せられます。

これまでずっと「個性を尊重した保育や教育」の大切さが言葉では謳われても、実態は、一人の先生が同じ課題をクラス全体に展開する保育や授業が一般的です。能力や適性が昔以上に異なる子どもたちに同じ教科書を用いて、一定の期間内で授業をすすめる方法は機能するのでしょうか？ なぜ、多くの国民は、単純に“おかしい”と考えないのでしょうか。

結果、ここ20年くらい前から、算数ができない、語彙も読解力も教養も乏しい大学生が顕著になってきました。私自身、25年以上前から今現在も複数の大学の非常勤講師をしているので実感です。その一方で、30年間には考えられない、優れた能力を持った若者がいろんな分野で活躍しています。ネット環境が整ったせいか、探究心旺盛な小学生は学校教育の外側で能力を開花させ、スポーツにおいても、10代で大人に引けを取らない優秀な選手が現れて、モノオジしない彼らの言動や落ち着いた態度は、敬服に値します。

経済のグローバル化が加速するに伴って、「経済格差」とともに「能力格差」「人間性の格差」も、今後、しばらくの間、どんどん広がり続けると予測しています。

現代という人類史上、超スゴ文明社会で暮らす私たちが、子どもたちに“健全な成長”を願っても、果たして、何が毒か何か、わかりづらくなってきた実感があります。大人も子どもも物事の感じ取り方や振る舞い方が、益々、多様多彩になってきた実感もあります。一旦、あるべき論（ニッポンの常識）を退けて、この事実を受け入れることから、保育は始まると考えます。定番活動という毎日まいにち繰り返す「①地味な保育」と子どもと共にテーマを掘り下げる「②広がる保育」、子どもどうして、とことん話し合う「③関係性を深める保育」、この3つ辺をより豊かにして「立体」をつくるイメージを抱いています。

文科省や有識者は口々に「生きる力を養う」「自己肯定感を育む」と訴えますが、私からすれば、「生きる力」も「自己肯定感」も、もともと誰もが持っているものなのに、どうして奪われたのか、大人（社会）のどのような考え方や振る舞いが、それらを奪ったのか、そこを自戒の念を把持しながら明らかにすることで、より具体的な手立てを見つけられると考えるべきです。個々の子どもたちの色合いは、家庭環境によると思われます。ですから各家庭と連携し“我が子自身が望む素敵な自分”になれるよう共に応援しましょう。

その一方で「すべての子どもは、すべて“私次第”で幸せになる！」と気負わないで信じて実践することもまた、私自身の唯一の課題であると感じる“年のはじめ”です。